

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 仏華嚴経「寂滅道場会」の研究

氏名 朴賢珍 (PARK Hyunjin)

〈大方広仏華嚴経〉(以下、仏華嚴経)は、複数の単独経典を編集・配列し、新たにいくつかの章を作成し、一つの経典として纏めあげた、いわゆる集成経典である。経全体のインド語系テキストは未だに発見されていない。現在、以下の漢訳二本と蔵訳一本が全体像を伝えている。

『大方広仏華嚴経』六十卷(以下『晋訳』): 仏馱跋陀羅訳、421年訳出、三十四章

『大方広仏華嚴経』八十卷(以下『唐訳』): 実叉難陀訳、699年訳出、三十九章

*Sangs rgyas phal po che zhes bya ba shin tu rgyas pa chen po'i mdo* (仏の大集団(仏華嚴)という大方広経、以下『蔵訳』): Ye shes sde 等訳、九世紀前半訳出、四十五章

以上の翻訳本のほかに、同経全体の構成を考察するうえで重要な資料として「大慈恩寺華嚴梵本」(以下「慈恩寺梵本」)を挙げることができる。中国華嚴宗第二祖の智儼(602-668)はその著『孔目章』の中で、当時大慈恩寺に所蔵されていたサンスクリットテキスト「慈恩寺梵本」の頌の数やサンスクリットから訳した章名・「入法界品」の善知識名などを目録化して残した。

本論文であつかう第一会「寂滅道場会」は、『晋訳』では「世間浄眼品」と「盧舎那仏品」の二章で構成されており、仏がマガダ国の寂滅道場の菩提樹下でさとりを開いた直後の出来事を描きだしている。この二章は、単行経典として存在し流布された痕跡が全くない。大本の編纂のさい新たに作成・付加されたものであり、成立順よりみれば最後の成立と考えられる。

『晋訳』→『唐訳』の段階で「寂滅道場会」は相当に増広されている。『晋訳』では大正蔵で二十三頁の分量だったものが、『唐訳』では五十七頁のものになっており、六章立てに細分化されている。

さらに『蔵訳』・「慈恩寺梵本」では十章立てに構成されている。

【表】「寂滅道場会」の章立て対照表（括弧内の数字は「章番号」）

『晋訳』	『唐訳』	『蔵訳』	「慈恩寺梵本」（目録のみ）
①世間浄眼品	(1)世主妙厳品	[1]一切世主妙厳出現品	1)世間浄眼品
②盧舎那仏品	(2)如来現相品	[2]如来品	2)如来品
	(3)普賢三昧品	[3]普賢三昧神変出現品	3)普賢菩薩修行入三摩提品
	(4)世界成就品	[4]世界海説浄方成就品	4)説入世界海品
	(5)華蔵世界品	[5]蓮華蔵莊嚴世界海清浄功德海照明品	5)浄世界海功德海光明品
		[6]世界海輪囷莊嚴海説品	6)世界輪囷莊嚴海品
		[7]世界海地莊嚴説品	7)説世界海莊嚴地品
		[8]国土性処説品	8)觀世界性処品
		[9]世界性安住説品	9)觀世界処安住音声品
	(6)毘盧遮那品	[10]毘盧舎那品	10)毘盧舎那品
			[11]如来華厳品

この相違点にかんして、「慈恩寺梵本」を『晋訳』の原典と同定した日野泰道[1955]は、「慈恩寺梵本」の章立てを『晋訳』の翻訳チームが改訂したと主張し、「慈恩寺梵本」と『蔵訳』との章立てが一致し、章題もだいたい一致することだけに基づいて、『唐訳』の原典も九章立てであったが、その翻訳チームが章立てを改訂したのではないかと推定した。

伊藤瑞叡[1983]は「慈恩寺梵本」をのぞく翻訳三本の全体的な構成を対照・考察し、『唐訳』の(5)「華蔵世界品」と『蔵訳』の[5]-[9]とを比較してみると「全く増補の箇所は見られず、むしろ説相においては『蔵訳』が『唐訳』よりも古形を示している」と述べている。

木村清孝[1984]は、翻訳三本および「慈恩寺梵本」の構成を比較考察したうえ、「『蔵訳』が『唐訳』よりも古形を示している」という伊藤氏の説にもとづいて、『唐訳』においては原本の内容的な改定に重点が置かれ、『蔵訳』においては主に諸章の新たな設定と導入による原本の全体的な構想の拡大が目指されたと推定している。

この諸研究は推測の域にとどまり、再考の余地が残されている。『唐訳』の注釈書である慧苑(673?-743?)の『刊定記』は、『唐訳』のサンスクリット原典はほんらい九章立てであったものを、漢訳の過程で五章立てに再構成したことを伝えている。この記録に従えば、『晋訳』以外、「慈恩寺梵本」・『唐訳』のサンスクリット原典・『蔵訳』の章立ては完全に一致することになる。すると、残された問題は、(一)現存する『晋訳』の「盧舎那仏品」が九章に細分化されていない理由、(二)伊藤氏の「『蔵訳』が『唐訳』よりも古形を示している」という説の意味であろう。

(一)については、二つの可能性が考えられる。『晋訳』のサンスクリット原典も九章立てであったものを、翻訳の過程で一章にまとめてしまった可能性がある。あるいは、「盧舎那仏品」はそもそもサンスクリット原典では細分化されていない単一の章であり、現存『晋訳』は、その本来の構成を忠実に伝えているとの想定も成り立つ。

(二)については、伊藤氏は具体的な根拠を提示していないため「説相における古形」が何を意味するのか不明のまま近年まで引用されている。『蔵訳』は年代的・分量的には最後の発展段階を示しているにもかかわらず、『唐訳』より古形を示しているならば、木村氏が言うように「『唐訳』の原典は内容的な改定に、『蔵訳』の原典は原本の全体的な構想の拡大に」重点が置かれたと見られよう。ただしじっさい古形とみなせる箇所があった場合、それがサンスクリット原典のレベルによるものか、あるいは漢訳の過程における「改定」「整備」によるものか、という問題が残されている。

本論文では、この二つの問題について考察することによって、諸本「寂滅道場会」の発展過程や編纂のメカニズム、および『唐訳』と『蔵訳』の関係を明かすことを目的とする。

序章では、本論文で扱う諸本「仏華嚴経」の訳出状況等を概観し、研究目的および本論文の構成について述べた。

第一章では、おもに『晋訳』にもとづいて、漢訳の処・会・章の構成と体裁について検討したのち、その成果にもとづいて『蔵訳』の体裁の不備について確認した。両漢訳は若干の不備はあるものの、全体にわたって一定の体裁で整えられている一方、『蔵訳』は処・会・章の体裁が崩れてしまっている例があり、それらの例を順次詳細に検討した。

第二章では、諸本「寂滅道場会」の章立ての相違について考察した。

(一) 慧苑の『刊定記』の記録に従えば、『晋訳』以外、「慈恩寺梵本」・『唐訳』のサンスクリット原典・『蔵訳』の章立ては一致することが明らかになる。

(二) 「慈恩寺梵本」を『晋訳』の原典と同定することは、特に年代的な問題があり、智儼の記録にもとづいて確実にいえるのは、「慈恩寺梵本」は『晋訳』の原典の系統に近いということである。

(三) 「普賢行説品」のサンスクリット写本断片と「仏不思議法品」のチベット語異訳(部分訳)に記されている章番号は、「盧舎那仏品」を九章立てとする他本とはまったく異なり、現存『晋訳』の章番号とほぼ一致する。すなわち、『晋訳』のサンスクリット原典では「盧舎那仏品」は単一の章であり、この一章は時代とともに増広されるにつれて、他本のように九章立てに細分化されたと推定される。

第三章では、『蔵訳』の章立てにしたがい、諸本「寂滅道場会」の諸章を比較検討し、各章の素材について考察した。

(一) 「寂滅道場会」は『晋訳』→『唐訳』『蔵訳』の過程で相当に増広・整備されている。そもそも諸項目や偈頌を「十」にまとめる傾向は『晋訳』全体にわたって現れる特徴のひとつであるが、この過程でより強く意識されている。すなわち、『晋訳』から『唐訳』『蔵訳』に至るその教説の発展が〈仏華嚴経〉全体の体系的整備と軌を一にして進んでいることである。

(二) 『唐訳』に比べて『蔵訳』における増補と確実に認められる箇所は語句レベルのごくわずかな分量である。

(三) 『唐訳』と『蔵訳』との間には、長行における段落の順序や偈頌の列挙順などに相違がみられる。全体的な構造や体裁においてより整合的、体系的に整備されているのは、年代的・分量的に最後の発展段階にある『蔵訳』ではなく、むしろ『蔵訳』より百年以上も早く訳出された『唐訳』のほうである。こうした相違がサンスクリット原典のレベルによるものであれば、体裁の整備という側面で『蔵訳』→『唐訳』の過程は予想できるが、『唐訳』→『蔵訳』の方向は考えがたい。『蔵訳』が全体にわたってその体裁が崩れていることを考えあわせると、『唐訳』の原典は体裁の整備や内容的な改

定に、『蔵訳』の原典は諸章の新たな設定と導入による原本の全体的な構想の拡大に、重点が置かれたとの想定が成り立つ。ただし、他の経典において、内容の増広ではなく、また章の入れ替えでもなく、章立ての改定でもなく、サンスクリット原典においてただ段落や偈頌をいれかえて整合的に整備した例は、他に報告事例がない。さらに『唐訳』は、漢訳の過程で章立てを編集しなおしてしまった例があるので、各章の細部まで編纂の手が加えられ整備された可能性も否定できない。漢訳の過程における「改定」や「整備」という側面を念頭におく必要がある。

(四) 出現大衆やモチーフ等の点において「寂滅道場会」は、同経末尾に「入法界品」として配置された *Gaṇḍavyūha* を意識して制作された、きわめて興味深いことが確認される。「寂滅道場会」に登場する道場神・穀神・主方神・主夜神・主昼神・身衆神・足行神などは、*Gaṇḍavyūha* 他に類を見ない大衆であり、「寂滅道場会」の大半を占めている「解脱門」のモチーフや〈仏華嚴経〉特有の「華嚴莊嚴世界海」等の概念は、*Gaṇḍavyūha* と見事に対応しているのである。